

智頭町芦津地区における 水系と水利施設の特徴

はじめに 鳥取県智頭町は千代川の源流に位置し、智頭杉と呼ばれるスギ生産の拠点となってきた町である。江戸時代から続く人工林とその森林に囲まれた山村集落、旧街道の宿場町から成る景観が評価され、2018年に「智頭の林業景観」として重要文化的景観に選定された。

文化遺産部景観研究室では2019・2020年度に「智頭の林業景観」の整備計画策定に向けた調査を智頭町から受託して実施した。本稿では水利用の特徴に焦点をあて、その成果の一端を紹介したい。

芦津地区の概要 調査をおこなったのは「智頭の林業景観」を構成する3地区のうちの1つである芦津地区である。芦津は千代川の支流・北股川の最上流部に位置し、智頭町内最大の山林面積を有する集落である。里山や深山の森林資源を活かして生業としつつ、集落内の農地で米や野菜を育てて自給自足の暮らしをおこなってきた。明治中期以降は育成林業やスギ苗生産の拠点として、さらに沖ノ山森林鉄道の起点としても活況を呈し、集落内での分家が可能となる経済的なゆとりを得ていった。

芦津は智頭町内でももっとも谷奥に位置するため雪への対応も欠かせない。集落内には水路が張り巡らされ、一年を通じて北股川やその支流（上田川や武田川）からの

水が流れる。水路の水は生活用水や灌漑用水のほか、冬場には除雪にも利用される。

イデの現況と変遷 調査ではまず、水路の流路と利用状況を確認した（図59）。芦津中心部を流れる水路網には北股川に設けられた2カ所の頭首工から水が引かれ、特に上流側（東側）の頭首工が芦津の大部分を潤していることがわかった。北股川から引水した水を分水させながら田畑や家々を巡るような水路網となっているが、基幹水路が集落中心を東西に走る町道芦津線に沿って流れるという構造にはなっていなかった。芦津の人々はこれら水路をイデと呼ぶ。

次に、A：「智頭郡芦津村田畑地続全図」（江戸時代後期・鳥取県立博物館所蔵）、B：「智頭町大字芦津地図」（明治中期～大正前期・智頭町所蔵）、C：『智頭郡村々井手絵図面上構』（文政十年・鳥取県立博物館所蔵）、D：『智頭郡村々井手堰樋橋堤樋戸根帳上溝』（文政十一年・鳥取県立博物館所蔵）を用いて、近世からの芦津の流路の変遷を検討した。その結果、A・Bの史料からは、近世・近代と現在の流路がほぼ同様であることがわかった。また、C・Dの史料には芦津の集落部分を通る水路として「道ノ元井手」、「前河井手」、「大井手」、「上ハ井手」の4水路が記されていた。その内容から大まかな位置を推定することはできたものの、そこに記載されている水路の取水口の位置や長さといった情報と同一のものを、現況の水路



図59 芦津地区の水系と水利施設の位置



図60 洗い場となるイトバ



図62 水神への供物としてのスギ

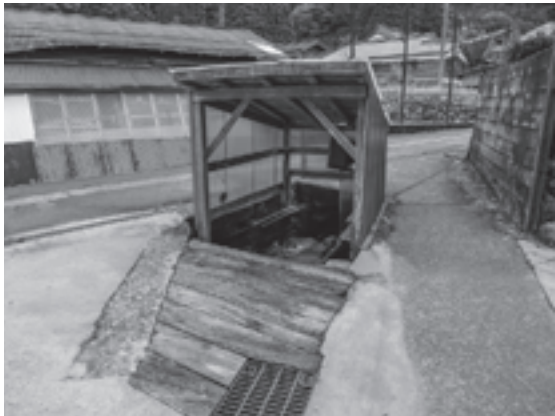


図61 覆屋が設けられたイトバ



図63 庭園の一部となるイケ

からも A・B の史料からも見出すことはできなかった。
イトバとイケ 芦津では用水を灌漑以外に生活用水としても多用する。昭和40年代に上水道が整備される前までは飲み水にも利用していた。現在は、野菜や農具などの物洗用、コイの飼育用、冬季の除雪用、深山で採れる栃の実のあく抜き用などに用いる。

水路には家ごとにイトバと呼ぶ水の利用場が設けられている (図60)。芦津中心部では42カ所のイトバを確認した。豪雪地帯ゆえにイトバを民家の一部に取り込んだり覆屋を設けたりする場合もあり (図61)、そうしたイトバは11カ所におよぶ。イトバにはたわしや砥石が常に置かれていたり、水神への供物としてスギが供えられていたりする (図62)。

水路の水を屋敷地内に引き込んでイケを設ける場合もあり、そうしたイケを13カ所で確認した。敷地の広い家では庭園の一部に仕立てる (図63)。こうしたイケやイトバでは、以前は食用としてコイの飼育がおこなわれ、山間にある芦津の貴重なタンパク源となっていた。現在は観賞

用として5カ所のイケ・イトバでコイが育てられている。

鳥取県内における用水利用 『新鳥取県史 民俗1 民俗編』(鳥取県立公文書館県史編さん室編2016)によると、鳥取県東部・中部の集落では、灌漑用水を生活用水としても利用するという慣行が顕著に認められるという。また、同書には、鳥取市佐伯町、若桜町若桜、大山町でも用水の利用場をイトバと呼ぶことが記されている。こうしたことから、芦津での生活用水としての利用やイトバの存在は、鳥取県の山間部での暮らしの典型と捉えられるだろう。ただし、同書には「智頭町ではほとんどのムラでツカイミズという言い方をしている」と記されているが、芦津ではそうした呼び名は確認できなかった。

小 結 智頭町内にはおよそ80の集落が存在するが、芦津以上の密度で水路やイトバ、イケが分布する地域はない。芦津は源流近くに位置しているため水質が良くても水量が豊富であることや、近代林業の拠点となり農地を宅地に変えて人口を増やしていったことがその要因ではないだろうか。

(恵谷浩子)